漱石と龍之介

Junko Higasa

「超訳ニーチェの言葉Ⅱ」（白取春彦編訳）が刊行されたので買って読んだ。前作は「悩み多き」という表現が適合したが、今回は少し生きることに力強い言葉が編まれている。読み終わった時、私の頭の中には芥川龍之介が思い浮かんだ。またそれと同時に「夏目漱石はゲーテで、芥川龍之介はニーチェだな」という比較も生まれた。同じ哲学でも人間を捉えるにあたって漱石は原理的・論理的で、龍之介は生理的・現実的であるように思う。年代もあるだろうが漱石の方が冷静で龍之介の方が感覚的だと思う。性格の特徴としては、漱石は面倒見がよく大勢の中でリーダーとして生きられるタイプであるが内面には他人を寄せ付けない頑とした孤独を隠しており、龍之介は安心感のある外面とは裏腹に内面には他人には理解しがたい強い感受性の孤独を抱えているタイプだと思う。この特質の巡り合わせは必ず漱石タイプが龍之介タイプを面倒見るパターンになる。逆はない。したがって出会うべくして出会った二人といえよう。ニーチェはゲーテに学んだ。龍之介はゲーテと漱石に学んだ。彼の感受性の「冷静」の均衡を保ったのはこの二人ではなかったろうか？龍之介は自分のニーチェ的な感性を東西二人の哲学分析フィルターを通して濾過できていたのではないかと思う。

さてゲーテと漱石を思い浮かべた時、二人の共通点は多才であるということである。ゲーテは英・仏・伊・羅・希臘・ヘブライ語を習得し「詩人・劇作家・小説家・哲学者・自然科学者・法律家・政治家」と幅広い分野で実質的行動を伴って活躍した。一方漱石は英・仏・羅・希臘語を解し「科学・哲学・音楽・美術」の様々な分野の知識を筆によって広く展開していった。漱石は『吾輩は猫である』第十一章の迷亭君の発言で、ヴァイオリンを入手して弾くために苦労する寒月君を「ウェルテル」（ゲーテの『若きウェルテルの悩み』）になぞらえている。また『草枕』の冒頭『智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい』（引用：新潮文庫）の背景はゲーテの哲学にあると言われている。漱石がゲーテに賛同し得たものも大きかったに違いない。そして漱石は『猫』第十一章の中でニーチェにも言及している。「ニーチェが超人を持ち出すのも世の中が個性の自由を許した結果、窮屈のやり場がなくて仕方なしにあんな哲学に変形した。理想というより不平。勇猛精進の声ではなく、怨恨痛憤の声だ。読んで壮快というよりむしろ気の毒だ」という内容で書いている。これはニーチェを否定したように見えるが「ニーチェの時代は英雄が出なかったから」という時代否定である。「ニーチェがあんなことを書かざるを得なかったのはそういう社会環境だった」ということである。それを考えると、龍之介の時代もまた個性の自由を許したがために窮屈のやり場のない時代だった。そしてニーチェが人間の本質を描き出したように、龍之介もまた人間の内面に隠された本性を筆によって表現した。一つの行動に伴う表と裏の心理を。私には「人間とはこんなものだよ」という二人の言葉の裏に、ニーチェの半泣きの顔と龍之介の無表情の顔が見える。「生きること」に苦しかったのは精神が破壊されたニーチェではなくて、まともな精神から逃れられなかった龍之介の方ではなかったのか？「生きることは苦しい。死ねないことはなお苦しい」これは唯一弟子が師を超えた垣根である。　(2012.8.25)